幼児の内発的動機づけを育てる
—保育者の関わり方への提案—

陳　惠　貞

はじめに

動機づけ研究には、外からの働きかけによって生じる「外発的動機づけ」と内面から生じる「内発的動機づけ」がある。そして、保育・教育現場では、課題を遂行するには「内発的動機づけ」が望ましいと思われる。一方、課題の遂行を果たさない子ども、つまりやる気のない子どもには、保育者らは何らの方法で「外発的動機づけ」によりやる気を引き起こそうと働きかける。保育・教育現場では、定められているカリキュラムにそって指導・支援を行い、その学習成果は指導する側とされる側の双方が評価される仕組みになっている。特に学歴社会では、結果と評価を重んじ、良い評価が得られなかった学習者は落ちこぼれていく現象が見受けられる。しかし、この評価制度は、内発的動機づけを育てることに適しておらず、教育的に問題がある。

奈須（2002）はSeligman(1975)の「学習性無力感」に基づき、「生まれつき無気力な人間はいない」、「無気力は学習される」と提起し、意欲の心理学理論と絡めて、やる気を保つ方法を示した。それは、人間は常に達成感のない環境におかれると無気力になり、やる気をなくしてしまう状態に陥ることを示唆している。一旦、無気力を学習してしまうと自信がなくなり、自己否定に陥りやすく、連鎖的に他のことについてもやる気を起こさなくなる可能性が高くなる。一度やる気を失うと、それを再起させるのは大変だと考えられる。以下、やる気のメカニズムを検証し、やる気を起こす方法を考えていく。さらに、「生まれつき無気力な人間はいない」という立場から、日々の保育・教育活動の中で、乳幼児期においてやる気を保っていく方法を考える。

まず、本研究で使われている「やる気」とう用語を先に断っておきたい。そもそも「やる気」という用語は心理学の専門用語ではない。宮本（1993）によれば、やる気は心理学では達成動機として研究されてきた。また、人がやる気になる仕組みについては、これまで動機づけという領域で研究が進められてきた（小野, 2003）。このように、「やる気」は日常的な用語であるが、動機づけ研究や達成動機研究の一環として認識されるようになった。やる気には内発的動機づけと外発的動機づけの両方が共存している。一見やる気があると評価された子どものやる気は内発的な自生的なものか、外発的な促されたものかは判断しきれない。つまり、保育者の働きかけによって生じた外発的動機づけもやる気として現われうる。以上をふまえ、本研究では、「やる気」を

子どもが課題を遂行する際に現れた行動様式に焦点をあて、「やり遂げる意志の表れ」として定義する。それが内発的動機づけによるものか、あるいは外発的動機づけによって触発されたものかを問わず、子どもが課題の取り組み方に積極的であることを示すと先に断っておく。

Ⅰ. 内発的動機づけと関連した研究

1. 内発的動機づけ

内発的動機づけの原型は知的好奇心であると Bruner(1966)が指摘して以来、波多野ら(1971,1973)と稲垣(1980)を中心に研究を展開してきた。さらに、上田(1983)・速水(1986)・杉原(1990)・櫻井(1990)・菊野ら(1994)も言及している。稲垣は、知的好奇心は概念的に「拡散的好奇心」と「特殊的好奇心」に区別している。「拡散的好奇心」は幅広いが浅く、いろいろな物事に興味を持ち、すぐに飛びつくものである。「特殊的好奇心」は幅が狭いが深く、すぐには飛びつかない。しかし、一旦興味が湧き出たら深く掘り探っていき、長続きするのが特徴である。内発的動機づけは、自ずと湧き出るというイメージがあり、特に目的意識を持っていない乳幼児には観察されにくいものと思われる。また、乳幼児において、内発的動機づけの出現はひたすら待つしかないという難点があげられる。そして、現れた内発的動機づけは、保育者が発達援助や学習において望ましいと思われる能力や行動あるいは乳幼児に身につけてほしい力と必ずしも一致するものではないという難点もある。

さらに、「拡散的好奇心」と「特殊的好奇心」の表れ方には、乳幼児の性格によっても違いが見られる。多くの物事に興味があり、すぐに飛びつく「拡散的好奇心」型の乳幼児は活発的に見られがちである。一方、「特殊的好奇心」型の乳幼児は、慎重で落ち着きがあり、集中力があり、まじめに課題に取り組むように見られがちである。

2. アンダーマイニング効果

自ら好きなことをやっていること、つまり内発的動機づけで行われている行動にごほうびを与えることによって動機づけが低下してしまう現象を「アンダーマイニング効果」という。Deci(1971)と Lepper ら(1973) によってなされた研究である。特に Lepper らは３～５歳のお絵描きが好きな園児を対象に実験した結果、絵を描いて外的報酬を与えると、自発的な興味で絵を描くのを妨げて、内発的動機づけを弱めてしまったと報告している。賞や罰の効果が強すぎたり、濫用されたりすると、賞を得ること、罰を回避すること自体が子どもの目的となってしまうのである。そして、何らかの報酬がもらえないと、学習意欲を持たなくなる。つまり、賞と罰（飴と鞭）の効果が子どもの内発的動機づけを妨害してしまうのである。

3. やる気と達成動機

宮本（1993）によると、「やる気は、心理学では達成動機として研究されている。達成動機とは、その文化において優れた目標であるとされる事柄に対して、卓越した水準でそれを成し遂げようとする意欲をいう」と記されている。かくして、「やる気」は日常的な用語であり、調査や実験の際には理解されやすく、達成動機研究の一環として位置づけられている。

古くからさまざまな動機づけ理論が研究されてきた。複数の要因が連動しながら人間の行動に影響を及ぼすという視点からの Atkinson(1964) の達成動機づけ理論は代表的である。Atkinson は、人間の達成動機づけを「達成傾向」と「失敗回避傾向」の 2 つ変数に分け、公式化を試みた（上淵,2004)。

達成傾向　＝　達成欲求　×　主観的な成功確率　×　成功の誘因価

失敗回避傾向　＝　失敗回避欲求　×　主観的な失敗確率　×　失敗の誘因価

Atkinson の理論によれば、達成傾向から失敗回避傾向を差し引いた変数の関数によって、達成行動が起こる。つまり、達成傾向が高くて、失敗回避傾向が低いと達成動機が高まり、達成行動が起こる。反対に、達成傾向が低くて、失敗回避傾向が高いと達成動機が阻害され、達成行動が起こらない。この理論は、子どもが一連の学習行動の中で、いかに「難しい課題だ、無理だ」という先入観を取り除き、難しいと感じながらも失敗回避傾向を抑え、「やってみよう」というような達成傾向を高めることを促進する必要があることを示唆している。達成動機理論について、筆者（陳，2006；2007）も Atkinson の達成動機理論について言及した。大学生の外国語学習について検討し、とりわけ、失敗回避傾向に重点をおいた。やる気を掘り起こし、いかに持続させていくかということが学習するにあたって大切だと思われる。

Ⅱ．保育・教育環境における教育的な操作と条件

前述したように、内発的動機づけと外発的動機づけがあり、知的好奇心の誘発による内発的動機づけが理想的である。しかし、子どもの内発的動機づけがあらわれるのを待つことしかできなくては、保育者側が受身になってしまうので、教育的効果を考えると保育・教育現場では難しいといえる。そこで、乳幼児の課題遂行の効果を高めるため、保育者による外発的動機づけが重要になってくる。とりわけ、乳幼児は環境要因に影響されやすいと考えられる。保育園や幼稚園に通っている子どもは、一番身近な親はもちろん、保育者の指導にも大いに影響を受ける。親と保育者の働きかけ（教育的操作）が、幼児の課題遂行にどのような効果をもたらすかに注目し、子どもの内発的動機づけを育てるには、保育者のどのような手だてが有効かを考える。幼児における内発的動機づけを妨害する要因として、先行研究の知見から 3 つの枠組みにしぼり考えてみる。

まず第一には、賞罰という枠組みである。旧来、日本の教育は中国の儒教思想に近い考えで飴と鞭の教えが主流であったが、昨今、西洋教育の影響を受け、ほめる教育が主流になってきた。

確かに、ほめることは教育的な効果が絶大で、子どもたちはほめられると自信がつき、自尊心が高まり、課題遂行につながる。外発的動機づけの働きかけの中で、最も有効なのは賞罰を課すことと思われている。しかし、アンダーマイニング効果のところで示したように、外的報酬は内発的動機づけに悪影響を与えるという示唆が、Lepper ら(1973) によってなされている。賞や罰の効果が子どもの内発的動機づけを妨害してしまうことは決して望ましいことではない。また、「賞をもらうためにやる」、「罰されるからやる」というようなサイクルになると、なかなかそこから抜け出せなくなる。常に外発的動機づけがなければやらない、自ら動かない無気力な行動様式になってしまう恐れがある。

第二は、競争するという枠組みで考えてみる。競争によって子どもの学習動機を引き出す方法もある。しかしその場合には、子どもの注意の焦点は課題の中身ではなく、むしろ競争の結果、つまり勝つか負けるかにしぼられてしまう (Nicholls,1984)。特に、遂行能力の低い子どもにとって、競争的目標構造は阻害的であると Ames(1984)が指摘した。そして、常に競争に負ける子どもは、ますます学習動機を低下させる恐れがある。

さらに、第三には、強制するという枠組みである。強制することによって、子どもの学習動機が抑えられる恐れがあると考えられる。強制というものに対する「自由」について、Montessori(1964) は、自由の概念を取り上げ、自由とは生命の尊重であるとした。さらに、生命は活動するものであるから、規制されることなく、自由に活動させるべきであると主張した。このような Montessori の子ども観は、内発的動機づけの概念に合致することが指摘されている (渋谷,1992)。

以上のように、賞罰・競争・強制は、子どもの内発的動機づけを妨害し、ひいては「生涯学習」や「自己学習」を育てるための阻害要因になると考えられる。筆者 (陳, 1993) は、親と保育者による賞罰・競争・強制の働きかけと子どもの内発的動機づけの関係について検討した。まず、815 名の保育園と幼稚園の園児の親について、日ごろの働きかけと子どもの特性的内発的動機づけ傾向 (好奇心・根気・持続性・競争心・自主性) を質問紙法で調べた。そのうち 643 名分が回収された。回収されたもののなかから更に 75 名分を保育者に評定してもらった。分析結果より、親たちは賞罰・競争・強制による働きかけを日ごろあまり積極的にはしないことが分かった。また、この 3 つの働きかけの中では、「強制」的な働きかけが比較的多かったようである。一方、親たちは子どもを「励ます」という働きかけを比較的よくするようで、それは「ごほうび」など「物質的な報酬」を与えることとは異なる意味を持っていることが分かった。そして、親の働きかけと子どもの特性の関係では、統計的な有意性は示されなかったものの、親による賞罰や競争の働きかけが多いと、子どもの自発性や持続性が阻害される傾向があることが示唆された。

また、保育者による働きかけについても実験を行った。被験者は 4 歳児 24 名と 5 歳児 75 名の計 99 名であった。保育者が園児に対して、賞罰・競争・強制のそれぞれの働きかけによって課題の遂行を促した。一定の時間において課題を遂行させた後、自由遊び場面を設けて課題で遊ばせた。自由遊び場面において子どもが課題を繰り返して遊ぶ時間を記録し、内発的動機づけ指標

とした。実験の分析結果からは、主効果は認められなかったけれども、保育者による強制条件の働きかけが園児の課題遂行時間に一番影響があったようである。園児たちは素直に保育者の指示通りに課題を遂行しようとしたことが分かった。

賞罰・競争・強制という内発的動機づけに好ましくない働きかけは、保育者として日々の保育活動の中ではしばしば見受けられるものである。どのようにして、子どもの内発的動機づけを阻害する要因を良い方向へ向かわせるのかは保育者の力量にかかっている。さらに、親や保育者が幼児に働きかける際、幼児の内在要因、つまり幼児の特性的内発的動機づけ傾向（性格）が関連するのではないかと考えられる。

Ⅲ. 幼児の「内発的動機づけ傾向」尺度の開発

未熟な言語発達のため、自分の行動をうまく説明できない幼児を理解するには、行動観察を通して読み取るしかないと思われる。さらに、詳しく幼児の特性的内発的動機づけ傾向（性格）や行動様式を調べるため、気質研究で使われている幼児行動様式質問紙 BSQ（McDevitt,S.C. & Carey,W.B., 1975）を用いて検討した（陳,1995；1996）。3～5歳の計585名の園児について、園児の親を対象に質問紙法による調査を行った。質問紙を配布する方法として、担任の保育者が園児に手渡し持ち帰らせた。親に100項目に及んだ質問紙を答えてもらい、記入した用紙を園児に持たせて回収した。回収日は若干異なるが、1週間で打ち切った。回収数は536部であり、回収率は91.6%であった。因子構造を検討した結果、抽出された3因子は、「好奇心・積極性」、「持続性」、「集中力のなさ」と命名した（Table 参照）。項目内容をみていくと、「好奇心・積極性」は「拡散的好奇心」に、「持続性」は「特殊的好奇心」に適した項目である。また、信頼性として内部一致性を検討した結果、ほぼ満足できるものであった。総合すると、物事に対する好奇心が強く、長続きができ、集中力のある子どもは、より内発的動機づけ傾向が高いと考える。これで幼児の特性的内発的動機づけ傾向を測る尺度ができたといえる。

幼児の達成行動は、その子が本来持っている性格に大いに左右されると思われる。保育者はこの幼児の「内発的動機づけ傾向」尺度を用い、幼児の性格や個性を把握し、それぞれの子どもに適した働きかけをすることが望まれる。具体的に、子どもの習い事を例としてあげてみる。「拡散的好奇心」の子どもは、毎日のように水泳・音楽・英語・書道・そろばん・空手やサッカーのようなスポーツ教室などに通い、多趣味である。しかし、どれも習熟しないうちに、すぐにやめてしまう傾向にある。それに対し、「特殊的好奇心」の子どもは、1つないし数少ない習い事しか選ばないが、毎日同じことを繰り返して続けてやるし、最後までやり通していくものである。このように、同じ内発的動機づけと言っても、長続きするという「持続性」の面に特徴がある。特に技能を要するものには、持続性がポイントになっているように思われる。近年、活躍しているスポーツ選手には「特殊的好奇心」の特徴があり、それが開花しているものとして、野球のイチロ

一選手やゴルフの石川遼選手やフィギュアスケートの浅田真央選手などが挙げられる。彼らの成功の秘訣は、並大抵でない練習量と探究心と努力にある。ここで、成功するポイントとして、才能以外に自らやるという「自己決定」、深く掘り探る「特殊的好奇心」、成功体験による「達成動機」、長く続ける「持続力」、失敗をしても再起する「我慢強い心」が欠かせないと考えられる。

Table 内発的動機づけ尺度の各項目の平均値・標準偏差および各尺度合計得点と各項目得点の相関

1：好奇心・積極性 （α係数=．79）	平均値	標準偏差	相 関
24. 新しい場所に行っても活発に動きまわる。	4.38	1.42	.72
43. 自分と同じ年代の見知らぬ子どもに近づいていける。	3.98	1.52	.74
31. 見知らぬ人に対し積極的な態度をとる。	3.49	1.56	.68
25. なじみのある場所より、新しいところへ行くことを好む。	3.66	1.18	.49
12. 新しいことをやってみたがる。	4.59	1.31	.50
*68. 新しいことに取り組む気にさせるには励ましてやる必要がある。	2.86	1.32	.47
*50. 自分でできると思わなければ、手を出そうとしない。	3.76	1.26	.44
* 6. 何か物事をする時、動作がのろい。	4.12	1.37	.48
*86. 初めての訪問客を避ける様子をする。	4.46	1.35	.55
*98. 新しい場面においては引っ込み思案になる。	3.35	1.34	.70
合計得点	38.65	13.63	
平 均	3.87		
2：持続性 （α係数=．70）			
35. きちんと習得してしまうまで投げ出さずに練習する。	3.37	1.16	.59
40. 興味のあることだと一つの活動に30分以上集中している。	4.78	1.17	.57
13. テレビを見たり、音楽を聴いている時、おとなしくすわっている。	4.45	1.26	.55
44. 玩具やゲームで静かに遊ぶ。	4.10	1.18	.56
27. 1時間以上、本を読んでいたり、絵を見ていたりする。	2.47	1.35	.59
90. 最後まで終えないとその遊びから離れるのをいやがる。	3.48	1.22	.49
83. 立ち上がって何かしたりせずに、じっと長い（1時間以上の）テレビ番組を見ている。	3.26	1.42	.56
73. 難しいことに取り組んでいる時にはなかなかあきらめようとしない。	3.52	1.19	.48
*87. お話を読んでもらっている時、落ち着きのない態度である。	4.41	1.22	.51
合計得点	33.84	11.17	
平 均	3.76		
3：集中力のなさ （α係数=．74）			
85. 自分のしていることに関係のない音でも、聞こえるとそちらに注意を向ける。	4.15	1.12	.69
77. 隣の部屋で声がすると、なんだろうというように注意を向ける。	4.28	1.16	.67
51. 誰かが部屋を出たり入ったりすると、そちらの方に注意を向ける。	3.82	1.29	.66
81. 親が部屋に入ってくると自分のしていることをやめて、そちらを見る。	3.49	1.32	.64
66. 電話が鳴ると遊びをやめてそちらを見る。	4.19	1.42	.60
48. 何か注意をひくものがあると、自分のしていることをやめ、そちらに気を奪われる。	4.54	1.07	.49
89. まわりで他の人たちが話していると、自分のしていることを中断して耳を傾ける。	3.02	1.09	.48
95. ドアのチャイムや電話の音に答えて、食事中でも食卓を離れようとする。	4.20	1.43	.55
合計得点	31.69	9.90	
平 均	3.96		

*は逆転項目　相関係数はすべて$p < .01$　$n=536$　（名古屋大学教育学部紀要 1996, Vol.43, p.235 をもとに作成）

どのような子どもが内発的動機づけの性格や特性をもっているであろうか。また、どのような環境でこのような子どもが育つのか。とりわけ教育における内発的動機づけの研究は多くなされてきた。しかし、速水(1989) は、動機づけ研究において異なる研究者によって提唱された類似した様々な構成概念が氾濫し、区別されていないことを指摘した。本研究では、すべての動機づけ研究を総括し、構成概念を明確化することは不可能である。しかし、いくつかの類似した研究をまとめ、その間の関連性や相互作用を検討し、提起する。これは、動機づけ研究の構成概念を統合し、明確化することの第一歩と考えられる。また、さまざまな分野の研究者がそれぞれの立場から、異なる視点による動機づけ研究をすることは、注目に値する分野であることを意味し、今後の展開を期待する価値があると思われる。

Ⅳ. 内発的動機づけを育てるため― プロセスに関与することがもたらす効果

学習性無力感（Learned Helplessness）の概念は、Seligman(1975) によって提唱された概念である。電気ショックを受けた犬が電気ショックを回避できないと思い込み、無力感を学習してしまうというものであった。人間も失敗経験が統制不可能であると思い込み、無力感を覚えてしまうことがあると推測できる。奈須(2002) は、Seligman の実験を紹介し、学習性無力感の概念を再提起した。確かに、実験結果では動物が無力感を学習してしまった。そして、人間も動物と似たような傾向があると推察される。しかし、長い人生の中で失敗経験は避けて通れないものである。どのような失敗をしても再起するためには、何が必要であろうか。それは少なくとも幼児期の親や保育者との信頼関係が関わっているではないかと考えられる。前項に挙げたスポーツ選手らの成功例を概観していくと、彼らは決して失敗していないわけではない。失敗しても恐れずに再起する原動力は、自らやろうと決め、やろうとする内発的動機づけがあることであろう。内発的動機づけは自己発生的な性質を持っている。決して他者から与えられるものではない。一方、外発的動機づけのような働きかけによってやる気を引き出す場合に必要なものは何であろうか。成功したスポーツ選手の多くは、家族の愛を信じ、教えてくれた人たち（学校の先生やコーチ、時には仲間)、支えてくれたすべての人を信じ、それをバネにして、全身全霊で課題やパフォーマンスに打ち込むことができたと語る。その信頼関係こそが内発的動機づけを引き出す外発的要因として働いているのではないか。それを現時点で科学的に証明するのは大変難しいが、人間には心の根源によりどころが必要であると推測される。選手たちは自分自身のモチベーションを高めて、自分を信じて前進することで成功を導いたのである。

信頼関係を築くのに、保育者ができることは何であろうか。それは、常に相手の立場に立って考えること、思いやることであると考えられる。保育者は一人ひとりの子どものことを理解し、信頼関係を築いて初めて子どもの保育ができたといえる。そして、保育者が子どものやる気を育て、やる気を保つ方法は、日常生活の中で事柄のプロセスに関わることである。それは、子ども

にすべてをしてあげるのではなく、一緒にすることによって共感を得て、楽しく過ごすことである。筆者（陳，2009）は、文部科学省の委託事業で認定こども園へ実地調査した際、園の給食方式によって子どもの食に関する意欲が異なることに気づかされた。園の給食には自園方式（園の調理室で作り、できたてを提供する）と外部搬入方式（外注か持参のお弁当）がある。楽しい給食時間には一見変わりがないようにみえるが、実地調査によって大きな違いが見出せた。自園方式のほうは、給食の時間になるとニオイで食に対する動機づけ（食べる意欲や食に関する話題を話す意欲など）が高まった。また、自園栽培で園児たちが自ら育てた野菜などを調理室に運び、調理されたものが食卓に上ると、ますます食べる意欲が湧き、苦手のはずのピーマン・ニンジン・トマト・ニガウリまで、楽しく美味しそうに食べたのである。このように、子どもたちは自らすべてのプロセスに関わることによって、好き嫌いの多い子も一連の実体験を通じ、「食べてみよう」と動機づけられるとともに心理的な面においても「自分でやった」という達成感と満足感が得られたと考えられる。そして、このような幼児期の体験で培った豊かな心や感性はその後の人生の糧になることが期待されるのである。

おわりに

人間のやる気はどこから来るのであろうか。赤ちゃんを観察してみると、常に周りの環境に興味を示し、好奇心に満ち溢れ、盛んに探索活動を行っている。歩き始めの時期は転んで痛くても、すぐに立ち直り懸命に頑張る姿がある。それは、いかにも愛らしく大人の目に映る。同時に何故このように挫折に屈することなくやる気があるのか、その生命力の素晴らしさに感動する。また、話せるようになれば、新しい物事を見つけるたびに、「これはなに？」と何度も納得するまで聞き、知りたがるようになる。このような精神が一生涯続くことを願わずにはいられない。しかし、乳幼児期はいきいきと遊び、意欲満々であるのに、小学校へ入学すると、いつの間にか大半の子どもが勉強嫌いになり、学年があがるに連れて学校がおもしろくなくなる。特に、中学校・高校にあがるとテストや受験のプレッシャーに押し潰され、学業についていけない生徒が目立つようになる。これではますます生きる意欲がなくなり、人生そのものが暗いものとなるのではないか。

幼少期のやる気や意欲を持続させる方策が教育現場では重要な課題となっている。本研究では、達成動機・やる気・内発的動機づけを高める方法に絞って考えてきた。そして、やる気のメカニズムを検証し、内発的動機づけを阻害する要因を検討してきた。今後の研究課題としては、一度失ったやる気を再起する方法について考えていきたい。失敗しない人はいないはずであり、むしろ失敗することのほうが多いのが人生なのではないだろうか。失敗を回避するのではなく、恐れず乗り越える力を身につけ、さらにそれをバネにして飛躍することのほうがより現実的であると考える。

また、幼児の「内発的動機づけ傾向」尺度の開発は、保育者に幼児に対する的確な判断の助け

になる。保育者が大いに尺度を利用し、子どもたちの内発的動機づけを引き出す手助けになればと考えている。ただし、尺度の開発から年月が経っているので、因子構造の変化を確認することが課題として残る。これからは、この幼児の「内発的動機づけ傾向」尺度を更に検証していき、信頼性を高め、応用にたえるものにしていきたい。

そして、新たな課題としては、保育者養成の立場から保育者の力量を向上させ、保育者の質を確保することが挙げられる。子どもたちのやる気・内発的動機づけを育てるには、やはり保育者に委ねられるところがある。子どもの個性・性格を十分に把握し、子どもの力を引き出し、子どもが信頼を寄せる保育者になるには、保育者本人のやる気や内発的動機づけも関わっているのである。

しかし、大学全入の時代のしわ寄せで、低学力の学生が目立ち、さらに養成校に入学した学生は必ずしも保育者を志すものではないことに問題が深刻化している（陳，2008；2010)。幼児教育の現場でも、同様の問題に直面している。

現在の保育・教育においては、人間の本質を見直し、急かさないように心のゆとり・よりどころ・居場所を確保することが先決である。そして、指導する側と指導される側の双方はじっくり課題に取り組む必要がある。キーワードは「持続性」である。目標達成への近道は、諦めずに続けることにあるかも知れない。保育者として子どもたちに与える環境は、心のゆとりを持ち、落ち着いて課題の遂行に取り組むことのできるものでなければならない。つまり、子どもの力を信じてじっくり待ち、必要な時に的確な援助の手を差し伸べる保育者が求められているのである。

引用文献

Ames,C. (1984) *Competitive,cooperative, and individualistic goal structures: A cognitive motivational analysis.* In Ames R.E. and Ames C.(Eds) Research on Motivation in Education Vol. 1, Student Motivation. Academic Press, 177-204.

Atkinson, J.W. (1964) *An introduction to motivation* Princeton,NJ: D.VanNostrand.

Bruner, J.S. (1966) *Toward a theory of instruction* Belknap. (田浦武雄・水越敏行訳 1976 教授論の建設 改訳版 黎明書房)

陳惠貞 (1993) 子どもの内発的動機づけを育てる条件について一保育者の働きかけの検討 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 96.

陳惠貞 (1995) 幼児の「特性的内発的動機づけ傾向」尺度の作成と検討 日本心理学会 第59回大会発表論文集, 916.

陳惠貞 (1996) 幼児の「内発的動機づけ傾向」尺度の作成と検討—気質質問紙ＢＳＱを基にして一 名古屋大学教育学部紀要第43巻, 231-241.

陳惠貞（2006）大学の外国語学習者における動機づけに関する実態調査　愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会紀要『言語文化』第 14 号，16-30.

陳惠貞（2007）大学の外国語学習者における動機づけと仮想的有能感に関する調査　愛知淑徳大学論集　コミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇　第 7 号，25-37.

陳惠貞（2008）保育士の動機づけについて一養成校の現場から　全国保育士養成協議会第 47 回研究大会研究発表論文集，238～239

陳惠貞（2009）認定こども園における子どもの発達と食育－動機づけの視点から－　名古屋経営短期大学子ども学科　子育て環境支援研究センター『子ども学研究論集』創刊号，39-49.

陳惠貞（2010）短大生における学習動機と仮想的有能感－持続性の視座から考えて－　名古屋経営短期大学子ども学科　子育て環境支援研究センター『子ども学研究論集』第 2 号，25-36.

Deci,E.L.（1971）*Effects of externally mediated rewards on intrinsic motivation.* Journal of Personality and Social Psychology, Vol.18, No.1, 105-115.

波多野誼余夫・稲垣佳世子（1971）　発達と教育における内発的動機づけ　明治図書

波多野誼余夫・稲垣佳世子（1973）　知的好奇心　中公新書

速水敏彦（1986）わかる授業の動機づけ　北尾倫彦・速水敏彦（著）わかる授業の心理学　有斐閣選書,35-82.

速水敏彦（1989）児童心理学の進歩 Vol.XXⅧ 第 7 章 動機づけ　金子書房

稲垣佳世子（1980）自己学習における動機づけ　波多野　誼余夫（編）　自己学習能力を育てる　東京大学出版会，33-95.

菊野春雄（1994）自己教育の心理学　北尾倫彦（編）有斐閣選書，57-73.

Lepper,M.R.,Greene,D.,& Nisbett,R.E.（1973）*Undermining children's intrinsic interest with extrinsic reward: A test of the "overjustification" hypothesis.* Jouranl of Personality and Social Psychology, Vol.28, No.1, 129-137

McDevitt,S.C. & Carey,W.B.（1975）*Behavioral Style Questionnaire for 3-7 year-old children*

宮本美沙子（1993）ゆとりある「やる気」を育てる　大日本図書，16-17.

Montessori,M.（1964）*The Montessori Method.* Robert　Bentley,Inc.

奈須正裕（2002）やる気はどこから来るのか・・・意欲の心理学理論　北大路書房

Nicholls,J.G.（1984）*Conceptions of ability and achievement motivation.* In R.Ames and C.Ames(Eds.), Research on Motivation in Education. Vol.1, Student Motivation. Academic Press, 39-68.

小野瀬雅人（2003）子どものやる気を引き出す条件　児童心理「やる気を育てる」Vol.6, No.787　金子書房，40-45.

櫻井茂男（1990）動機づけ　無藤隆ら編　発達心理学入門Ⅰ　乳児・幼児・児童　東京大学出版社，197-209.

Seligman, M.E.P.（1975）*Helplessness: On depression, development, and death,* W.H. Freeman and Company, San Francisco　（セーリグマン　1985　うつ病の行動学　平井久・木村駿監訳　誠信書房）

渋谷憲一（1992）モンテッソーリ教育ための心理学　日本モンテッソーリ教育　総合研究所

杉原一昭（1990）パズルに挑む子どもたち　高野清純ら編　児童心理学を学ぶ（新版）有斐閣選書，99-119.

上淵　寿（2004）動機づけ研究の最前線　北大路書房

上田吉一　(1983) 動機と人間性　誠信書房, 159-164.

（名古屋経営短期大学子ども学科　准教授）